

「ゴルゴタの刑場に向かう」

2014年12月05日

マルコによる福音書 15 章 21 節～25 節。そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。そして、イエスをゴルゴタという所——その意味は「されこうべの場所」——に連れて行った。没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、／その服を分け合った、／だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。

主イエスは、総督ピラトによって、ローマに反逆する「ユダヤ人の王」という政治的罪状で十字架刑が宣告された。ローマ兵たちにあらん限りの侮辱を受け、十字架を背負われ、ゴルゴタの刑場に向かわせられた。主イエスは毎日、エルサレム神殿に上り、神殿当局と激しい議論を戦わせる緊張した日々を送っていた。そして前夜は、最高法院で「降格儀式」を受け、今朝は早くから、ピラトから尋問を受け、鞭打たれ、ローマ兵たちから嘲笑され嘲られ、暴力的に痛めつけられた。主イエスの心と体は憔悴し切っていた。重い十字架を背負うことができず、途中で座り込んでしまった。そこへ、キレネ人シモンが通りかかった。彼は地中海のキレネから「過越祭」に巡礼に来たのであろう。エルサレムの栄華と繁栄に心を奪われていた。そのシモンが、主イエスの「市中引き回し」に出会い、負えなくなった主イエスの代わりに、十字架を負えとローマ兵に命令された。これ以上の迷惑はない。しかし、ローマ兵の命令に逆らうことはできない。憤懣やるかたない思いで、代わりに背負わざるを得なかった。憧れのエルサレム巡礼はとんでもない悲劇に変わった。

マルコ福音書は、シモンを説明して「アレクサンドロとルフォスとの父」と書いている。アレクサンドロとルフォスは初代教会において、知られた人であったからである。パウロが記したローマの信徒への手紙 16 章に、ローマ教会の一人ひとりの名前を上げて、挨拶を書き送っている。その 13 節に「主に結ばれている選ばれた者ルフォス、およびその母によるしく。彼女はわたしにとっても母なのです」と書いている。このルフォスはシモンの息子ではないか。そしてパウロは、ルフォスの母は「わたしにとっても母なのです」と尊敬の意を表している。すると、シモンとその妻、二人の息子たちアレクサンドロとルフォスは皆、クリスチャンになったということになる。

シモンは主イエスの代わりに無理やりに十字架を負わせられた。ところが、その負った十字架によって、主イエスを信じるクリスチャンになり、家族全員が信仰を共にする者になった。しかも、父シモンを形容する時、二人の息子の名前を書くほど有名なクリスチャンに成長した。驚くようなことであるが、あり得ることではないか。

十字架は自らが勢い込んで負うものではないだろう。思い掛けず仕方なく負わされる。しかし、負わされた十字架によって、私のために十字架を負ってくださった主イエスを信じる者に変えられる。シモンの負った十字架は、この秘儀を伝えている。

苦しむ主イエスに没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、お受けにならず、苦しみを真正面から受け止められた。兵士たちは主イエスの服を、詩編 22 編 19 節の預言通り、くじ引きで分け合った。ゴルゴタの刑場に辿りついた主イエスは午前 9 時に十字架につけられた。シモンは主イエスの苦悩の全てを見続けていただろう。